

きを、四つ別々に折り返して、4の様にし、次に5のホの線を、への線に合せて折つて、トの線にするのです、四所とも同じ様に、この四つわ動物の足でございませす、それからチの所を、への線から中へ折つて、一つひだを取つて又外へ折つてごらんなさい、これは尾でございませす、これで出来上りました、何と豚の様ではありませせんか。

ワシントンの勇行 (ついで)

やまとの翁

抜手を切つて進み行く少年を見つめたる母親の眼の凄さ。殆、瞬一もしない。渦づ巻く水中に沈んだ時には、同時に彼女の心も沈んだ。が、再び水面に浮み出て、不屈の兩腕もて烈しく寄せかかる大濤をかき分けつゝ、子供の後追ふ少年の姿

を見た時の彼女の喜びは！

けれども悲しいかな、尊むべき少年の奇代の勇行も、今は殆んど成効の望もないかの様だ。言はゞ目前漸一丈許りの處で、急流に翻弄ばれる子供を見て居ながら、どうしても之に追つ付くことが出来ぬとは、ても倍も。

河上の光景は俄に一轉して、今や此急流第一の難所と聞こへた場所に近ついた。數十裡の間縦横に奔逸し來つた急流は、茲に淀滞して忽ち幾十尋とも底知れぬ深潭をなし、水は油を流せるが如くに静の様ではあるが、併も凄しき大渦が此處彼處に七重八重と涌き立つて居る。而して此深渦の水のふける處といふのが、所謂削り成せるが如き絶壁で、巨大の響を以て落ち下るのであるから、其勢の凄しさ、天を覆ふ水煙と耳を聳する水聲と

自然の壯觀も茲に至りて殆んど極まれりと云つてもよそ。

で、泳いでは愚か、小舟に乗つてすら、今迄誰もこの難所に冒險を試みた者とはないのである。今や少年は此危険極る境界に立つに至つたことを覺つたものだから、満身の力を奮つて小供の後を逐つかけた。三たび子供を捕へるに垂々として三度之を逸し去つた。其第三回目である、恰、瀧の下り口であつたのであるから、これが失敗つた。見た其時の母親の心といふものは、深く沈んで仕舞つて、もーこれまで、是に至つては萬事休焉と思つてか『あゝ』と許り深き歎聲を泄らした。勿論岸邊の者も皆其通りだと残念がつた。

然し、敢爲なる少年に取つて然らずだ。彼は更に一番の勇氣を鼓して前進した。息を礙らして見

てあれば、涌き返る大渦の中を切つて少年は彼の子供に殆んど手の届かん許りに近接して追つかけ居る。

然も危険は刻一刻と迫つて、追ふ者も追はれる者も忽ちにして、瀑布の落ち口の、澎湃として水煙みなぎり上つて、凄じき勢を以て落下する間隙にまで流し去られた。天を覆ふ許りの水煙白沫の間にあざやかに浮きつ沈みつ二人の姿が見える。見るに目もくれ心も消ゆる許り。

突如として岸邊の見物人よりドツと許り一時に歎聲が聞こえた、正に少年は彼の子供を捕へて、片手に高く之をさし上げたのである。併も其歎聲の時に變じて慘憺たる恐怖の叫となつた。少年は子供を捧げたまゝ、俄然として飛瀑の下に落ち込んだのである。嗚呼何等の悲惨ぞ。

母は霧地に岸の彼方に走り下つた、そして瞳を定めて瀧の麓を咏めたが、やがて心から喜の叫を發した。

『オー彼處に、皆さん 彼處に居ますよ。あゝ眞個に有りがたい』

確に少年は、瀧の下まで落ち込まされたが、少しの怪我もしないで、一旦舞ひ込んだ渦の中から再び浮み上つた所であつた。片手に高く子供をさし上げ片手を以て岸邊を目がけて泳いで居る。

岸邊よりは歡聲新に涌くが如くに起つた。是彼等しく走り依つて少年を引き上げた。

少年は子供を抱いたまゝ、汀に打ち倒れた。子供は勿論絶息して居る。母親は急いで我子を胸に押し當てた。一方では子供を介抱する、一方では少年を介抱するこゝ暫くは皆が只だ夢中に忙がしい。

で、子供が漸く息を吹き返して安々と母の腕に

抱かれて眠についた時、母親は我子の命の親たる此少年に向つて、計り知れぬ感謝を表した。『神が

屹度貴下に御報ひ下さるに相違ない。今日の御働きの爲に屹度大變な御酬があるでしよ。夫から

貴下の祝福を祈る者は私一人ではありますまい』  
實に其通りであつた。數年経つて世界大強國の

國民の運命を荷うて立つに至つた其人は、全く此日の英雄たる少年である。後年に至つて彼の長さ

生涯の間盡したる全事業に依りて、彼は萬人尊崇の中心となり二百五十年後の今日、世界中の誰一

人其名を知らない者のない様になつたが、そは彼の事業中には常に今日此母親の子の危難に當つて

ジョージ、ワシントンといふ性格を顯はした所の所謂「身を殺して仁をなす」と云ふ精神が終始一

貫して居つたからである

(完)

短編 獨逸教育話

其一、北風

仁壽堂主人

北風が或時散步に出かけました、しかし北風は  
 ぜんたいいたづらものなんですから、いろ／＼ふ  
 らちな事をいたしまして、庭園へまいりましては  
 薔薇の花をとり百合を莖から折り杏をちぎり梨を  
 ば泥の中へほうりだしました、田畑へまいりまし  
 ては一層らんぼうをしまして、穂をみじんにして  
 しまい又た能く熟しませぬ林檎をふりをとし枝葉  
 をむしりてふりまきました古いよわつた木はつき  
 ころばして根こぎにいたしてしまいました。  
 そこで、いたづらされた者たちは風王の所へ訴  
 へてまいりました、此王は空氣城におすまいでし

て随意に風をばつかまへてをいたり、又は出て行  
 かしたりする方なんです、皆々のものたらは粗暴  
 な北風がいたしましたことから、中にも庭園や  
 田畑がいたづらされて大そうこまつてをりますこ  
 どを申し出ました、そこで王様が北風をよびだし  
 て皆のもの、申し出はほんとうかどふかたづねら  
 れました、北風は現在いたづらした庭園や田畑が  
 みなく目の前に居ることですから言ひけすこと  
 が出来ませぬ。そこで王様が『なぜおまへは左様  
 なことをしたのか？』北風『へー私はわるい量見で  
 はなかつたのです只薔薇や百合や杏やなど、遊ば  
 ふと思ひましたのでして私はそんな、ひどひこと  
 をしようとは思ひませんでした』と答へました、  
 そこで王様が『そーか、おまへは左様な、そゝつ  
 かな手あらものならこれから外へだすことはでき